

<講演抄録>1. 日本における医・歯学の学位制度の起原とその発展(第36回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題) : 歯科医師の立場より

著者	杉本 是孝, 中山 孝子
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	19
号	1
ページ	80-80
発行年	2000-06
URL	http://hdl.handle.net/10097/31709

第 36 回東北大学歯学会プログラム

日時：平成 11 年 12 月 10 日（金）

場所：東北大学歯学部 B 棟 1 階講義室

— 一 般 演 題 —

1. 日本における医・歯学の学位制度の起原とその発展 —— 歯科医師の立場より ——

杉本是孝¹，中山孝子^{1,2} (杉本歯科口腔外科¹，在ロンドン U.K.^{1,2})

日本における博士の学位は 1887 年に初めて勅令により公布され、現在すでに 110 数年を経過している。その間 2 回の学位令改定、さらに学校教育法の制定により、極めて多くの受領者を輩出している。

しかしながら、学位令公布の初期には、歯学医師は教育機関の関係から、永年にわたり大学院が認可されている医育機関に審査権をゆだね、医学博士の学位が授与されていた。

そこで、医・歯学の立場から日本における学位制度の起原とその発展について、1887 年の学位令公布から 1920 年の新学位規定までの 33 年間について、調査し得た項目について分析を行った。

さらに、1920 年から 1947 年までの期間については歯科医師の立場より検討し、極めて興味深い調査結果を得た。すなわち、1) 歯科医師で最初に学位を授与されたのは、花沢鼎 (1923 年) で、学位令公布より 36 年目である。2) 学位受領者 (初期) 30 名の提出した主論文の研究分野は形態学分野が 2/3 をしめていた。3) 平均年齢は満 38.3 歳であった。4) 副論文はおよそ 10 編以上、最高は 17 編である。5) 女性歯科医師の最初は二之宮千代子 (1943 年) で 17 年間の研究成果で副論文は 9 編である。

また、旧七帝国大学（とくに東北帝国大学）医学部において、歯科医師が初めて医学博士学位を授与された実態について、その概要を述べる。

当時の学位取得への道はきわめて険しい道程であり、歯科医師の地位向上と偏見を取り除くために大きな原動力となったことが推察された。

2. Xylitol による Mutans streptococci の酸産生阻害効果：増殖条件と pH の影響

宮澤はるみ¹，高橋信博²，佐藤拓一²，真柳秀昭¹，山田正² (東北大学歯学部小児歯科学講座¹，口腔生化学講座²)

Xylitol は、齲蝕を引き起こす酸の材料にならないだけでなく、長期摂取により、齲蝕発生にもっとも関係があるといわれる mutans streptococci を減少させるといわれている。Xylitol の抑制メカニズムは増殖抑制と酸産生抑制であるといわれるが、その基礎的研究は十分ではない。そこで xylitol の酸産生抑制効果に対する ① 環境 pH、② 菌の増殖状態の影響について嫌気条件下で検討した。pH 7.0 と 5.0 で、対数増殖期および静止期に集めた菌に glucose (10 mM) あるいは glucose と xylitol (10~120 mM) の混合物を加えて代謝させ、その時の pH 低下と酸産生速度を測定した。pH 低下は、pH が中性付近では xylitol 濃度の増加に従い緩やかになったが、pH 5 付近では、glucose のみの場合と変わらなくなり、pH は最終的に pH 4 付近まで低下した。pH 7.0 における酸産生速度は、xylitol (60 mM) が存在すると、対数増殖期の菌で $30 \pm 8\%$ 減少したが、静止期の菌での減少はわずか $11 \pm 6\%$ だった。一方、pH 5.0 では、対数増殖期の酸産生速度は $12 \pm 3\%$ 減少しただけだった。以上の結果より、xylitol の酸産生阻害は、静止期より対数増殖期の菌で、酸性 pH より中性 pH で、より効果があると考えられた。実際の口腔内環境を考えると、口腔清掃が不良な口腔内の歯垢 pH は、糖の供給ですぐに酸性になりなかなか中性へ回復しない。このような状態で xylitol を摂取しても酸産生抑制効果は小さいと思われる。しかし、口腔清掃状態が良好で歯垢 pH が余り低下しない場合には、xylitol の阻害効果を効果的に発揮でき、mutans streptococci の定着を阻害する可能性が期待できる。